

後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン
3. 解放の神学1——フェミニスト神学1
4. 解放の神学2——フェミニスト神学2 10/31
5. 政治神学2——アガンベン 11/7
6. 政治神学3——ジジェク 11/14
7. 研究発表 11/21
8. 研究発表 11/28
9. 研究発表 12/5（予備：1/9）
10. 解放の神学3——黒人神学 12/12
11. 解放の神学4——アジア 12/19 12/26 は休講（東京出張）
12. 宗教の神学とヒック 1/16
13. エコロジーの神学 1/23

<前回>フェミニスト神学1：デイリとルーサー

(1) フェミニスト神学の誕生

1. ユング：三位一体の象徴（キリスト教に規定された西洋文化圏における完全な自己の象徴）は完全(vollkommen)であるが、十全(vollständig)ではない。

↓

女性や身体の理解のゆがみ、悪の問題におけるアポリア

2. 1960年代以前のフェミニズムが主として男性中心の社会システムにおける女性の権利獲得を目指していたのに対して、この30年間のフェミニズムは社会システム全般に対する異議の申し立てを超えて、それを支え正当化している価値観や世界像の批判へと進み、文化や意識のレベルでの変革を追求するに至っている（大越, 1997）。

①直接的暴力。 ②キリスト教が男性優位の価値観を制度化・構造化。

③男性中心の価値観の枠内における理想の女性像を女性に押しつけ。

④宗教経験を表現する男性中心の言語。

4. 争点としての聖書解釈の問題（フェミニスト的聖書解釈）

(2) デイリとルーサー

6. 神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている点に関して。

デイリ(Daly, 1973)は、イエスは男性であり、それゆえ女性の生き方の規範になり得ないと主張する。

7. 真の人間、規範的人間としてのイエスの否定であり、イエスの神性の否定をさらに超えた徹底的なキリスト教批判。

8. ルーサー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して、フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。

9. ルーサー(Ruether, 1983, 116-138)。

10. イエスの宗教運動から家父長的なキリスト論（正統キリスト論）の成立という400年以上のわたる歴史的なプロセス（キリスト論の家父長化）は、イエスの宗教運動からの変質であり、それは、他のキリスト論の諸様態の排除によって可能となった。

11. イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と関連しうるキリスト論）。

フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し、続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。

13. リューサーが注目するのは、神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者的千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。

↓

14. 「支配－従属」のモデルに規定されないキリスト論（フェミニスト的キリスト論）の再構築。

「解放者として語るイエスの能力は、男であることに存するのではなく、この支配の制度を批判し、彼自身の人格の中に、奉仕と互いの法的権限を認め合う新しい人間性を具現しようとした、その事実に存するのである。……神学的に言って、イエスが男であることは、究極的な重要性を持たないと言えるかもしれない。それは、家父長的特権を認める枠組みの中で、社会的象徴的意味を持つだけである。この意味で、解放された人間の代表であり、解放を促す神の言葉であるキリストとしてのイエスは、家父長制のケノーシスと新しい人間性の宣言を顕わにする。この新しい人間性は、ヒエラルキーに基づく社会的地位の特権を捨て、低き者のために語る生き方を通して宣言されるのである。」(ibid.,137)

15. デイリ：男性と女性の非和協的な敵対関係を前提とした「女性解放論」

リューサー：「女と男からなる新しい人間性」の実現という意味における「人間解放の神学」

4. 解放の神学2——フェミニスト神学

1. フェミニスト神学キリスト論：

キリスト象徴の具体的内容（男性としてのイエス）をどのように評価するのか。

キリスト象徴の具体的内容は神学的には二次的なものにすぎないと判断してよいのか。

↓

神やキリストの男性としての象徴的性質は歴史的文化的な諸条件に規定された偶然的なものであり、原理的に考えれば、キリスト教にとって、神は父なる神ではなく母なる神でもよかった、神の子キリスト・イエスは男性ではなく女性でもよかった。

デイリは当然このように主張するだろうし、またリューサーも先の引用の範囲で見れば、これに同意するように思われる。

↓

2. しかし、宗教が抽象的な哲学思想や倫理思想とは違って、具体的な象徴体系によって構成された意味世界であることから判断するならば、象徴の具体的内容はそれぞれの宗教にとってその本質に関わる意義を有していると考えざるべきではないだろうか。

それとも、このような疑問を發すること自体が、男性的イメージに固執する古いキリスト教の名残と言うべきなのであろうか。

3. マクフェイグの隠喩神学：

神学における象徴や隠喩の意義を論じ、その上でフェミニスト神学の問題にも論究。

4. 神学する新しい感受性

・「相関の方法」(ティリッヒ)：問い(状況)と答え(メッセージ)

・神学が神学として成り立つための条件の一つ：時代状況に対する適切な感受性を有していること。

マクフェイグ、三つの「新しい感受性」(McFague, 3-28)

1) すべての生命体と我々人間の本質的な相互依存性についての全体論的でエコロジカルな意識

2) 地球の運命、とりわけ核のホロコーストに対する人間の責任の自覚

3) 人間が構築する思想はすべて隠喩的であり、それゆえ部分的で不確かな性格を免れていないという意識。

3) → 神学思想もそれが人間の営みである限り、隠喩的性格を免れることができず、素朴実在論に基づく神学的教説の教条主義的絶対化は不可能である。

↓

神学者は、「神」などの基本概念が人間のイマジネーションに深く根ざす象徴・隠喩・モデルという基盤の上に成り立っていることを十分に自覚しなければならない（神の象徴・隠喩・モデル→神概念→神論・倫理）。

象徴や隠喩に依拠しない神自体についての直接的で絶対的に確実な理論を所有できるというのは幻想である。

5. 神学言語の隠喩的性格

- ・神学的概念や理論体系は象徴・隠喩・モデルに基づいている。

＝神学が展開する神論は「神」についての部分的で間接的な真理にすぎない。

↓

フェミニスト神学が伝統的なキリスト教神学の神論やキリスト論を批判する際の理論的基盤となりうる。素朴な絶対性の主張を無効にする（神学言語の隠喩性の持つ否定的な側面）。

- ・マクフェイグ：神学言語の隠喩性の持つ積極的側面

神学の言語表現が象徴的で隠喩的であることは、宗教的実在について現実的に語る具体的な仕方を示している。

- ・「神学とは構成的で隠喩的なものであるが、それは<非神話論化>を行うのではなく、<再神話論化>を行うのである」（ibid., 32）。神話的であることの積極的な意味の再発見。
- ・キリスト論にとってキリストの具体的なイメージの内容は原理的に二次的な意味を持つにすぎないのではないか、という先の問い。

神学は個々のイメージの具体的な内容の意味を正しく理解しなければならないと答えられる。

男性としてのイエスがキリストであるということ、神が父なる神として告白されてきたことは、信仰と神学にとってどうでもよい事柄ではないのである。

6. 隠喩とモデル（cf. リクール『生きた隠喩』岩波書店）

- ・隠喩：語のレベルでの意味の移動（多義性）に還元できるものではなく、むしろ経験の拡張に関係する文（判断、解釈）のレベルの言語現象。

↓

隠喩の問題は語の装飾の事柄である前に基本的には認知の問題であり、注目すべきは隠喩における経験の記述機能（経験のコピー）ではなく、新しい事態を自らの経験世界に媒介し経験を拡張し変革する機能。

- ・「神は我々の母である」という表現は、それが隠喩として成功する場合には、「神は我々の父である」という伝統において成長した人間に対して、新しい認知を生み出し既存の経験世界を変革する機能を果たす。
- ・モデル：一定の類似性によって隣接した隠喩群（隠喩的ネットワーク）、

隠喩が文のレベルの言語現象であるのに対して、隠喩よりも範列的に上位レベルの言語現象と考えられる（この点、マクフェイグの議論は不十分）。

父なる神という神モデル：創造者、助け主、救済者などの隠喩表現が属する。

主なる神という神モデル：王、審判者、至高者といった隠喩表現が属する。

- ・隠喩：実体的な同一性の主張ではなく、それが指示する対象との類似性の発見。
<ではない>+<である>。

「それは定義(definition)としてではなく適切な説明(account)としてなされるのである。すなわち、<神は母である>と言うことは、神を母と定義したり、<神>と<母>という用語の同一性を主張したりしているのではなく、我々がどう語ってよいかわからない事柄を——神に関連して——母という隠喩を通して考察していることを示唆しているのである」（ibid., 33-34）。

7. 隠喩・モデルの複数性

- ・キリスト教の伝統の中には、神あるいはキリストに関して、多様な隠喩表現やモデルが存在してきた。

ティリッヒ：正統教義において使用される隠喩表現として、主なる神と父なる神という二つのグループ（芦名、1995、296-302 cf. Tillich, 1951, 286-289）。

リューサー：神秘主義や預言的終末運動における女性的イメージ

- ・同一の対象に対して異なった複数の隠喩表現あるいはモデルが適用されることは論理的矛盾ではない（神の異なった諸モデルの間には、異なった神概念の場合とは違って、論理的排他性を設定する必要はない）。

隠喩あるいはモデルとは、本来不適當な、部分的かつ不十分な語り方。

「語りうる最大のことは、<神－世界>関係の一定の局面あるいは諸局面がこれこれのモデルによって特定の時間と場所にふさわしい仕方では照らし出されているということなのである」（ibid., 38-39）。

- ・隠喩とモデルの複数性・多様性は単一の隠喩表現に単純化できない。
モデルの複数性は同一の神に対する人間の関わり方の歴史的文化的な多様性に即応している。
- ・問われるべきこと：どれか一つのモデルのみを絶対化し、他のモデルを排除することではなく、それぞれの歴史的文化的状況に対してどのモデルが相応しいのか、個々のモデルがキリスト教の伝統においてどのように機能してきたのか、を的確に判断すること。

「隠喩神学は多元主義的である」（ibid., 39）

- ・マクフェイグは現代の状況において神の女性モデルの方が伝統的な家父長モデルより適切であることを、彼女自身の宗教経験を踏まえつつ、強く主張する。この点でマクフェイグはフェミニスト神学に大いに共感を感じている（ibid., xiv）。

しかし、

神の女性モデルがあらゆる歴史的文化的な状況に対して絶対的に正しい唯一のモデルであることは、マクフェイグの隠喩神学の立場ではあり得ない。この点でマクフェイグは急進的なフェミニスト神学と一線を画している。

- ・問題は、男性モデルを女性モデルに置き換えることではなく、女性モデルに適切な位置を与えることによって男性モデルへの過度の偏りを矯正し、全体のバランスを取ること。

8. 隠喩・モデル選択とその条件（伝統と状況）

キリスト教の伝統において神モデルが複数存在し、文化的コンテクストに応じて神経験を表現してきたということは、神モデルはすべて相対的なものであり、どれを選ぶかは個人の好みの問題であるということの意味するのであろうか。

↓

モデルの選択基準、選択の適切性。

マクフェイグが採用する基準は、ティリッヒの「相関の方法」の定式に従っている（ibid., p.41）。

神学が応答しなければならない状況の分析と、状況に対する応答がそこからなされる<キリスト教的伝統の究極的規範の理解>という二つの基準。

↓

キリスト教の伝統の問い直し・再考。リューサーと一致。

<参考文献>

1. Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress Press, 1987.
, *The Body of God. An Ecological Theology*, Fortress Press, 1993.
2. Paul Tillich, *Systematic Theology*, vol.1, The University of Chicago Press, 1951.
3. 芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。
『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、1995年。
『自然神学再考』晃洋書房、2007年。